無題（仮・第一章）

中根辰榮

《はじめに・お願い》

本作品は複数章立ての構成となっております。現在残りを執筆中です。どうぞ気長にお待ちください。少なくとも卒業までには書き上げますから。ね？

加えて、本作品は各章ごとに提出、批評会を通して校正を加え、最終的に全章校正終了後にまとめて一作品として掲載する予定です。

※

「何故此処に居るのか」

何時も此の事が頭を巡つてゐる。

是れ迄の事を整理しやふにも、何処からが正確か、私には曖昧模糊として解らなひ。鼠色。白色。黒色。天井の色が転転とした事だけが妙に脳裏に焼き付いて離れなひ。今は白色。ただ、光源の脆弱性と影の存在が黒色にさせてゐる。毎日其れを見てゐるが、最近の黒色は妙にぶれる。或る日は白色の効きすぎて瞼の裏にまで侵入する。又或る日は黒色が効きすぎて自身の所在を失う。

一、二時間前まで電球が灯つてゐたが、一定の刻限を過ぎると

「申し訳御座ませんが、消灯です」

とだけ言つて暖色が外部から消される。得も言われぬ敗北感を感じずには居られなひのである――とは言いつつも、別に苦言を呈したひだとか断固抗議すると云ひたひ程迄ではなひ事を爾に注記する――。呆然と穴凹だらけの混凝土を見つめる。取手付の金属板から何かが覗きこんでゐるのに気付いたのは黒色の濃度が僅かながら変化したからであつた。外部との接続は左側の小窓か、右側の金属板の隙間だけである。左を一瞥して変化が無ひのを確認したのでさう思つたといふ訳である。其処には、青服が立つてゐたのである――暗所ではあるが、昼間に見た青服と容姿がほぼ合致したので判断できた――。

「あ、すみません。起こしてしまひましたか」

オオタさんであつた。此処の見張を任ぜられてゐる。

「いえ。お気になさらんで」

お互ひに微笑む。

「あそうだ。山田さん、明日ご移動でしたよね」

「はい？　あ、ええまあ」

……矢張此の名前には慣れなひ。正式に授けられたものだと雖も。

「くれぐれも体調は崩さなひやう。気をつけて」

「ああ。有難う御座います」

「それぢやあ、お休みなさひ」

青服さんを見送る。再び寝台に寝そべる。

……私は、誰なのか……

※※※

ほんの少しかび臭い教室。白髪小柄のご老体先生が口の筋肉を奮っている。

「いやしかしながら私は常々思うんですけどね」

常々思うんですけどね、という文言が来た。こぼれ話のシグナルだ。授業が中盤に差し掛かると必ず言ってくれる。がら空きの机の中から忍ばせたスマホを出す。音をたてないように少しだけ持ち上げて引き出す。ブラウザを開くと、トップページのニュースが目に入る。ここ最近のニュースはイギリスとかのタブロイド紙と大差ないものになった。凋落、と言えばそれまでだけど、そこからまたいつかはスタンスが周回して戻ってくるらしい。父親の言い分だ。言ったの忘れたの、と母親が言う。そうだっけ、という父親。私自身母と同じことを言いたいと何度思ったか。

ニュースに関することとなると、いつもこの事が頭を巡っている。

ウェブサイトが出しているニュース一覧を見回す。

特段、ニュースサイトとかを好んで覗くわけではない。一瞥して良さそうな記事だけを見る。日によって食いつき方が違うという事だ。他の人だって多分そうしてると思う。だけど、自分の近親者が書いたものとなれば話はやはり別になる。パブリックスペースに自身の近しい人が作ったものがある。気にならないわけがないのだ。口が悪いかもしれないが、大衆週刊誌にあるようなスキャンダラスだったりセクシャルだったりする記事を執筆する人の家族はその名前を見たらどういう心境になるんだろう。ああ、でもそもそも論で読みたくもないかも。自分の夫や妻、父や母が低俗に思えてくるなら読まなきゃいい。臭い物に蓋をする、こう昔から言われてるくらいだもの。

記憶喪失の男性への独自取材決定

（飯田正平）

噂をすればなんとやら。リンクの文字列をタップする。おじいちゃん先生はまだ脱線した話を続けている。机下に隠した小さな液晶に表示された字列を、目で辿り始めた。

現代社会では、(正式名称は健忘であるが)記憶喪失を正式な疾患として捉えるのはごく普通の事である。しかしながら、その人々がどのような生活や待遇にあるかをよく知る人はせいぜい行政関係者や保護施設職員に限られるであろう。今回、本記事を担当する赤江良平(あかえ・りょうへい)記者はある記憶喪失の男性へアポイントを取り、彼の生活を数回にわたって取材、本誌に『失ったもの、新たなもの―記憶喪失者の生活について―』として連載することが決定した。

今回の掲載に際して、担当の赤江記者は『読者の誰もが、ある日突然遭遇する蓋然性をもつ記憶喪失に対し、現実では想像以上に認識が低い。この連載によって、こ

の疾病に対する考え方をより深めることが出来ればと思う』と意気込みを語っている。
次回より連載を始めるにあたり、取材の経緯や今後の予定について赤い記者に訊いた。以下要約を述べる。
先月半ばの事になるが、とある放送局で、テレビで記憶喪失者の公開捜索を行う番組が放映されていた。言うまでもないが、テレビ番組というものは視聴者の知らざる領域に潜入し、その実態を捉え啓蒙することで視聴者の興味を惹きつけ視聴させる。つまり、行方不明や記憶喪失者は人々にその実態を十分知られていないということである。
然しながら、逆の立場を考えてみると末恐ろしいと思えてくるのである。多かれ少なかれ記憶を失い、ともすれば自分を失う。そして仮に授けられたアイデンティティと仮の物で生きながらえる。以前のものを取り戻せる保証のないまま、行くあてもないまま過ごさねばならない。本質的な何かを失ったまま生活せざるを得ないのである。そして、失ったものを(能動的であれ受動的であれ)取り戻す(させる又はさせてあげる)ためにこのような番組に出演しているのである。ただしこのように行動したところで完全に思い出せることはごく稀である。
以上のように、信頼できるものなく、満ち足りることもなく生きるのを強いられることに、私は恐怖心を強く抱いたのである。前述の通り、記憶喪失は誰にも起こり得る突発性の疾患である。つまり、人生が記憶喪失によって激変する可能性が、常に存在すると言えるのである。そのような事を、テレビのシリアスなコンテンツのひとつ程度で捉えるのは果たして危惧するべきではないのか。ここから本連載の概観を書き上げ、上司に提示したのは凡そ二、三日と私にしては非常に早い進行であった(私はモノをあまり効率的に進めるのが苦手である)。そして現在に至る。
さて、早速であるが次週六月十五日より掲載を開始することとなる。そこで、読者の皆様においては、もしも記憶を失ったらどうなるかを皆様なりに考えてみてもらいたい。

読んでいてまず私の頭の中を駆けたのは、相変わらず自分語りを入れているなあ、ということだった。二、三ヶ月前、帰宅してすぐ
「編集長にひどく怒られた」
と言って一晩中むすっとしていた事があった。事情を聞くと、社会面に出す記事の草稿を提出したのはいいのだが、編集長に
「自分の事情を話しすぎだ」
と言われこっぴどく叱られたのだという。あの時は肩を落とすほど叱責されたというのに。この記事を見るに、結局反省してないらしかった。まあ、ものを書く人には各々癖があるんだと思うし、単にそれを押さえつければいいってもんじゃないのはなんとなく分かる。寧ろ書き手にとって、そういう癖が何一つ見当たらない文章は最も避けるべき書き方なのかとも思う。……まあ私自身はさして文章を書かないからこんな風に言える壇上に上がることすらできていないんだけど。
とにかく、父は今度からの連載で記憶喪失について取り上げることにした。確かに記事に書いてある通り、先週末に記憶喪失者とかの捜索を行うテレビ番組を観た。でも父はさして興味なさげにしていたと思う。記事を書いて給料をもらいたいが肝心のネタがなかったから、たまたま観たそういう番組からインスピレーションを貰ったのだろうか。やっぱりもの書きの頭の中はよくわからない……。
「赤江しゃん」
はっ、とさせられた。ご老体の口から発せられた声は、どうやら私に向けられているらしい。
「何こそこそしゅてるんですか」
口角筋が弱いせいで一部が赤ちゃん言葉に聞こえる。携帯に見入って頭の中で考えていたあまりここが授業空間であることを忘れてしまっていた。
「い、いえ。少し体調がすぐれないだけで」
「……ああ、しょう。体がこたえるときは無理しないでね。ええっと、どこまで話したんだっけな……」
心拍数がものすごく上がった。この先生は、授業の雰囲気を壊されると授業を放棄するから色々と面倒なのである。不幸中の幸いだった。
「ああ、そうそう。明治時代においては、日本は西洋に倣ったいわゆる『文明開化』を成し遂げたのは君たちもよく存じ上げていると思います。けれどね」
こういう風に、私はたまに父親の書いた記事を読んでは頭の中で批評している。実は、ここ数年は内容にさほど「魅かれた」ことが無かった。なにせすぐそばに書き手がいるのだ。つまり一度記事について尋ねてしまえば、それで興が大体出尽くしてしまう。噛み締め、少しでも調べてみようという気が萎縮する。だからもう今じゃ「ネタバレさせない・聞かないために、興味を持たない」という方が正しいのかもしれない。
「その裏にあった本当の社会を、皆さんは知るべきだと、私は思うのです」
ご老体は話を続けるけれど、一通り父親の記事は読み終えてしまった。ブラウザバックして、また記事一覧を

見渡す。一昨日、都心であった自動車暴走事故の続報、某動画配信者の不適切行為、また別の配信者は引退するらしい。動画サイトはあんまり好きではない。自分たちの時間を割いてまで作った動画を公開することが、私には彼等自身の内をひけらかしているように思えてしまうのである。そうも容易く内面をさらしてしまってよいのか。まあ、こういう考えを仮にどこかの世界で披露したところで、だから何、の一言で片づけられちゃうんだろうな。

ふと、記事の乱立する世界に、気になる文言を見つけた。

「壁に謎の落書き　周辺の防犯カメラに犯人映らず」

カメラに映らないと言ったって、どうせ死角をうまくついてやったんだろう。最近の記事はこうやってタイトルだけは大げさにして、中身すっからかんなことも多くなった。……思えば、これも父親の言い草だった。

東京都〇〇区にて、最近落書きの迷惑行為が横行している。それもここ半月ほどで件数が二十倍に増加している。

警察はこれに対し、警官数十人を動員し、さらに有志の近隣住民がボランティア活動として共同で夜中の見回り活動を強化した。しかし、一向に被害は減少しない。そもそも、現場に向かう道沿いには、少なくとも二台以上の防犯カメラまたは人感センサー付きの防犯ライトが設置されていた。しかし、監視システムを調査しても全く通った痕跡が確認されず、捜査は難航している。

加えて、その落書きについても、奇妙な点が多いという。捜査関係者らによると、まずインクの材質が特殊で、溶剤などで除去しようとしても　中々落とせないものであること、さらに、その内容についても何故か日本史に出てくる崩し字で理路整然とした文章の内容であるらしい。捜査関係者からは「歴史家がやっているのではないか」との声も上がっている。現在も捜査は継続中である。

奇妙な話もあったもんだ。落とせないインクで古文の落書きとは。世も末とはよく言われてるけど、頭のいい奴らも結局人間なのかもしれない。犯人が歴史家だったら、今私が言ったことが立証されて、頭の固いコメンテーターや老教師らが声を荒げることになるんだろう。

外の日差しが一層強まってきた。遠くの入道雲も、背を伸ばし始めた。大半の同級生の目は、明日の全校集会と明後日からの長い休みにだけ向いていた。

※※

……なんでこの連載企画が通ったんだろうか。俺が出した企画は三つ。例の企画は、二番目の中継ぎだった。最初の「昨今の芸能ゴシップに関する諸考察」は

「同業者からのリスクが大きすぎるから無理」

と突っぱねられた。例の企画は、ここ最近家のテレビとかで見聞きしたものを基にテキトーに編み出したもので、まったくと言っていいほど本腰を入れていなかった。そしたら会議で編集長が、

「行けるかな」

こう呟かれてしまったものだから、練りに練った第三案を言わないまま、じゃあよろしくね、と言われた。

萎びたチェアの上で仰け反る。天井を見上げれば、単調な蛍光管の並列が眩しい。スキンケアを怠った人間の顔面なんか照らさないでくれよ。恥ずかしいだろ。ていうか、俺は照明に当たるべき人間じゃないだろ。あくまで俺は、ごまんと居る「大衆読み物の作り手」の一人であって、こんな照明をあてて頂ける身分にはいない。しがない金を、他よりちょっといい位の文章力で稼ぐ小銭稼ぎである。まあそうはいってもれっきとした一職業人ではあるが。

「……そんな小作人は、はて今回どうやって記事を書こうかね」

言うまでもないが、医学の知識は皆無に等しい。そんな人間が健忘症に苛まれる人を論じていく。提言の中に、こじつけで「一般人から見た健忘との向き合い方」のような感覚を入れてはみたが、それでも他人の読みものを書く人間としては、さすがにもう少し知識を入れていかなければならないだろう。そもそもあの記事上で出た俺のコメントも、会議直後におどおどとしながら

「帰りに本買っていかないとなぁ……」

飯田に話した愚痴の丸写しだった。

まずは基礎文献探しからだ。あと使用許諾も取らないと。

「……あ、取材許可も取っておかないと」

記事にも書いたが、この記事で要となるある男性――一応、山田浩平という名前を仮称としてもらったと聞いた――に出会ったのは、全くの偶然だった。

企画を通せ(てしまっ)た一昨日、ぱっと思い浮かんだのは警察であった。近隣の警察署の電話番号を調べる。電話帳なんて何年ぶりに開いたことか。三カ所にかけた。

「個人情報となりますので」

よくよく考えたら当然だった。人権を守る機関の一つがべらべらと個人情報の仲介業をするわけがない。

身寄りのない人が行くような場所は他にないか。脳内デスクを荒々しく漁る。そこから百科事典を引っ張り出し、ページをバラバラとめくる。他人よりは少しページの黒い面積が多いつもりだったが、記憶喪失に関する項目はなかった。関連していそうな言葉を探る。

「現在山田さんは都内の保護施設で生活をしていらっしゃいます」

この前のテレビ司会が言ったひとことだ。保護施設。現実世界に意識を戻し、目前のデスクトップでブラウザを開き、四字熟語と「都内」を打ち込む。　それらしき施設が数件見つかった。最近のご時世、ワンクリックで電話番号まで分かる。デスク上の白が黄ばんだ固定電話を取り上げ、番号を押していった。

……

「ああ、山田さんのことですね」

「そちらにいらっしゃるんですか」

「ええまあ」

……

「なんとか取材させていただくことはできませんでしょうか」

「彼本人に聞いてみないと何とも言えませんが」

「もちろん、ご本人が嫌ということであれば無理強いはいたしませんので」

正直、正当な理由を以てこの企画を中止できるのならそれでよしだと思っている。なにせ偶然観たものを薄く伸ばしたような計画だ。別企画も無いわけじゃない。

「分かりました。それでは本人に確認してみます。アカエさん、で宜しかったでしょうか」

「はい」

「詳細は先ほどの通りで大丈夫でしょうか」

「はい」

「一応確認しますが、山田さんを通して、記憶喪失者がいかにして生活し、その中にどのような問題があるのかを知りたいと」

「はい」

「わかりました」

「よろしくお願いします」

少しして電話が切れた。交渉が巧く行ってしまった。プライバシーだの守秘義務だのと言われて拒まれるかと思っていた。

「……こうも進んじゃったらなあ」

冊子の塔の上、壁沿いに浮く白い時計は五時寸前だった。うちの編集長は残業を嫌う。訊くところでは長期の海外留学経験者だとのことで、おそらく海外の働き方に憧れているからだろう、とのことだ。

「帰ろう」

帰りの道中に、紀伊之国屋書店に寄って行こう。あそこなら品揃えもあるだろうから、新聞記事で使うにも問題ない本の一冊や二冊はあるはずだ。

「ああ。あと夕食の買い出しもだ」

今日は弓子の帰りが遅い。論文作成の仕上げだとか何とかで今日は帰れない、と言ってきたのは今朝だった。大事なことを言うのを後回しにしてしまうのは、新婚当初からお互いの悪い癖だった。とりわけ、

「何でそういうこと先に言わないの！」

と、この癖を発動するといつも怒鳴り叱ってくる紅羽には大変申し訳ないと思う。その紅羽は、もうすでに家路について、もしかしたらもう家にいるかもしれない

デスクの上から荷物を掘り出し、鞄にポイと放り込む。

「お先に失礼します」

お疲れさまでーす、と返事が数人から返ってきた。編集長はデスクトップパソコンに首を突っ込んで、耳にもイヤホンを突っ込んでいた。聞こえるはずもなかった。

電車とか、エレベーターだとか。こういう箱の中で大人数が密閉される空間は本当に嫌いだ。高校の通学でこの辺の電車を使うようになってからというもの、ずっとそう思っている。電車に乗り込むと、すぐにイヤホンを取り出して装着する。いっそのこと、より狭い自分の世界に没入した方がいい。曲は何にしようか。いや、機械に選ばせるのもたまには良いか。アプリの「おまかせミックス」を再生する。最近じゃ機械もよく学ぶ。勝手に俺の情報を取っては分析して、俺の好みをくすぐってくる。そんな人工頭脳が一手目に出してきたのは、まさに鳩尾に入れてくるストレートパンチだった。

「シンプリー・レッドねえ……」

俺が子供の頃、いとこの家族が近所だったから遊びに行くと、よくこのバンドの曲がかかっていた。シンプルなシンセサイザーやパーカッションに、ミック・ハックネルのボーカルが心地良い。たまには頼ってみるもんだな。結局、その懐かしさと、夕飯を娘が作ってくれているからか、この日の帰路は妙に足が軽かった。まあ、明日から重い足を長らく引っ張らなくちゃならないから、その代わりの特典みたいなもんなのかもしれない。

※

館長から呼び出された。入所初日に言はれた事は遵守してゐるつもりであつたが、何か知らなひ處で何かをしてしまつたのか。目の前の煎茶にも口を付けられなひ。

もし追い出されたら。何処かの野原でくたばるのか。然し、法を犯したのなら致し方なからふ。かちやん、と戸が開く。にこやかな館長であつた。
「山田さん、今日は有難ふね」
「いえいえ、別に出掛ける様な場所も有りませんでしたので」
にこやかな顔は変わらなひ。
「あの、本日はだふいふご用で」
「……」
表情の曇り。私に何か重大な事を告げねばならぬらしひ。
「山田さん、この前テレビに出たでせふ」
「ああ、はい」
館長さんが私の記憶を思い出す何かの契機になればと言つて、テレビ番組に出演した。多くの電話に囲まれる中、私に関する目撃証言をできる限り収集し、そして私の知り得ることを総て話した。とは言へ、あの時確実だったのは、
・自分は生まれが農家である事
・実家を出て働きに出ていた事
これきりであつた。司会者が
「かふ何か些細な事でも良ひですので、何か他に思ひ出せることは有りませんか」
と何度もせびるかの様に言つてきた。付き添ってくれた館長に、
「いくら何でもさふいふ風に急かさないでくださひ」
と言わせてしまつたのが申し訳無かつた。
結局、あの放送時には私が聴いて脳が動かされる様な情報は何も無かった。
「まあそう簡単には行かなひから」
と、帰りの車内で慰められたが、何故だか館長の目を見るのがつらいやふに感じた。
あの後も、施設の電話に警察から番組放送終了後に集まった多くの情報をまとめて報告して貰つた。ただ、大体が的外れなものだったのだ。
「それでね」
「はい」
「それを見た新聞社の記者さんから連絡を頂いたのよ」
「はあ」
「あなたに取材を申し込みたひらしひのよ」
「取材、ですか」
だふやら例の番組を観た記者が、其れを基に記事を書く事にしたと言ふ。
「それで、一応あなたに取材して良いか聞かふと思つて今日は来てもらつた訳なの。ほら、偶にさふいふものが嫌な人だつている訳だし」
かふいう配慮をしてくれるのが此の館長さんの良い所だ。警察での仮保護ののち、此処に来てからと云ふもの、彼女の恩情に救われた事ばかりである。
「だふかな。勿論、無理強いはしないから」
「……」
正直考えものだと思つてゐた。取材を受けることで、私の何かしらが分かるやもしれぬ。だが、逆は。本当は菊を喪つた事が実は正しいのではなひか。開放することが、何か漠然とした脅威を導くのではなひか。
心内の葛藤。心の動き合表面に出る。頭をかきむしる。
唸り。
「山田さん?」
義務感。恐怖。進むべき道。罠。
「だ、大丈夫ですか」
……いや、進まねばならぬ。
何があらふとも、我々は進まねばならぬ。
「わかりました。取材は受けることにします」

※※

あっという間に週末が過ぎていった。
取材の許可が下りたというのは隣のデスクにいた同僚からだった。代わりに出てくれたらしい(よくよく考えたら、これって本来はあっちゃならないことであるような気もしたが、今回はそこに突っ込みは入れないでおく)。内容を聞くところでは、例の男性が取材を承諾してくれたらしい。こうもうまく取材のアポが取れるものなんだな。いつかの取材で北陸の資産家を取材しようと電話でその可否を聞いたら、ふざけたことをぬかすなと言われ、果てにはお前の会社を突き止めてやると言って脅迫されたことがあったものだから、取材許可の電話をかけるときはいつもびくついてしまう。今回みたいに電話を取って物腰よく対応してくれただけ正直マシだなと思っていた。そして、結果は見事許可取り成功。世の中巧く行く時とそうでない時が極端すぎる。折り返し電話を掛けた。
「今回はどうもありがとうございます」
「いえいえ。それは山田さん本人におっしゃっていただければ」
「もし気が変わって取材できないようでしたら再度お電話いただければ」
「いえいえ、彼本人がどうしてもと言っていますので」
「左様でございますか。分かりました。では、明後日お

伺いしたいのですがいかがでしょうか」
「分かりました。施設は開いておりますので時間はどのぐらいで」
「そうですね……」
施設までは凡そ三十分位である。午前は編集会議だ。
「十四時頃でいかがでしょうか」
「分かりました。それで伝えます。もし都合が悪い場合は再度連絡しますので」
「はい。よろしくお願いします」
電話対応をしている女性の館長は、本当に物腰が柔らかい。最近のオペレーターなんかよりよっぽど優しさある言葉だ。施設の雰囲気は大体電話口でわかるものだと取材のアポ取りを何度もしてきた身としてよくわかる。これは良いロケーションを得られたかもしれない。あながちこの連載もハズレでない、そんな気すらしている。半分くらいのところで栞を挟んだ、記憶喪失に関する本を読み始める。
何故だか、今回の連載は最初こそ消極性しかなかった。が、いろいろと関連本を読むにつれ、少しずつ興味を持ち始めた。まあ確かに知識が増えれば興味関心の度合いが増すのも至極当然なのかもしれない。けれど、今回買った本の冊数が一回目の購入にしては異様に多いし、それを読むスピードも妙に早い。買った冊数が六冊で、いま四冊目である。何処かから学ぶように諭されたかのように、取り憑かれたように――はさすがに言葉が過ぎるな――読み進めていった。編集長からは
「張り切ってるわね」
と、さあさあもっと読みなさいと言わんとするような言葉までかけられた。こうまで言われては引き下がれない。
「……まあなんか引き下がる気も無くなったけど」

※

「答へられなひ處は、無理しなひで下さひ」
取材は、私の部屋で行ふ事と相成つた。場所に関する希望は特段示さなかつたのだが、館長と記者――確かアカエさんと言つたはずだ――が話し合つて、自室で気を落ち着かせた状態で訊く事が出来る様にしてくれたらしひ――まあ其れを対象者の目前で話すのはだふなのかとは思つたが――。かくして、私の「机」を挟んで、「自室」の座布団に座り、記者と私は話を始めた。
「最初に確認します。この取材記録はここに在るぼいすれこーだーで録音します。宜しいでせふか」
「あ、録音されるんですか」
「はい。あ、若し其れが嫌だといふ場合は」
「お気になさらず。大丈夫ですよ」
「ああ良かつた。分かりました。それでは先ずお名前を」
「……一応、山田浩平と申します。仮名ではありますが」
「本名に覚えは」
「いいえ。全く」
「分かりました。では年齢は」
「色々と調べて頂ひたところでは、二十代後半だとの事です」
「お調べになつたんですか」
「はい。最近では歯の摩耗具合などから推定できるさふです(注1)」
「成程。それでは次の質問に。自分の生まれなどに覚えは在りますか。先日のテレビ番組では僅かに覚えていらした様ですが」
目前に館長さんが茶を差し出してくれた。
「有難う御座ひます。……あそこで語つた事以外、相変はらず思ひ出せません」
「では、出演以降、思ひ出すことが出来た記憶は他に在りますか」
「テレビで言つたことが、より鮮明になつたと云ふか」
「といふと」
「先ず、自分は生まれが農家であると言つた事なのですが、山間で小規模の農家を営んでいたと思ひます。あと、実家を出て働きに出ていた事についても、其の家からすごく離れた所へ出稼ぎをしてゐた……と。すみません。曖昧模糊としすぎてゐますよね」
「気にしなひで。記憶は徐々に戻るものですから」
「はい。……あと」
「何か」
「何と言ひますか。酷く暑ひ環境に居たのも、何となくですがさふだつたと思ひます」
「気候が暑ひ場所へ出稼ぎに出てゐた、と」
「はい」
「御家族については」
「全く。両親が、私が居る以上確実である位です」
「さふですよね」
「すみません何も過去のことを思ひ出せず」
「いやいや。思ひ出せなひものを無理に訊き出すことはしませんから」
「ご配慮頂き有難ふ御座ひます」
「質問を変えませふ。現在の生活について、何かこう不便だとか、勝手が違うと感じることは」

「そうですね。正直わからない、というのが答えですね。抑々相対化するような元の文化も思ひ出せなひですし」
「其れも確かですね。此処での生活は如何ですか」
「非常に助かっています。衣食住は当面の間困らなひやふにして頂いて」
「他の入居者さんとは」
「食事とかの際に喋る位ですが、やはりさふいふ場だけでも喋りながら出来る事は良ひものですよ」
「結構一日は長ひと思ひますが、どのやふに過ごされているんですか」
「戸籍などが無ひので、働きに出たくても出ることが出来なひから困りものなんですよね。基本的に施設内の図書室に行つて読書してゐます。あと入居者の中には障がい者の方も居るので其の方々の補助とかをすることも」
「施設内で慈善活動をなさつている、と」
「まあさふいふ事になりますかね」
……
この後小一時間ほど日常生活につひて取材をし、この日の取材は終わった。
「本日はだふも有難ふ御座ひました。今後、取材を何度かさせて頂くと思ひますので何卒宜しくお願ひします」
「いえ。こちらこそ宜しくお願ひします」
「一応、此方が私の連絡先となります。万が一何か思ひ出された事等が御座いましたら連絡を」
「はい」
「それでは」
館長に連れられて、アカエ記者は帰つていつた。私の記憶。思ひ出せなひ物事。今思ひ出すことの出来る記憶も、まだ不鮮明な所ばかりである。けれども。

何故だか知らぬ。が、頭の中に思ひ浮かぶ僅かな過去は、褪せた写真ばかりで、鮮やかさなど遥か昔に、いやそれどころか元から無ひかのやふに思ふのである。

※※※

「ただいまー」
父の気だるそうな声が玄関から響く。
「おかえりー。今朝言ってたより帰り早くない？」
「取材が思いの外進んでね」
「例の記憶喪失者の連載？」
「何で知ってんだ」
「あたしだってニュースを見ないわけじゃないから」
「まあ、そんなとこだよ」
「そんなはぐらかさなくたっていいじゃん。どうだったの」
「いやあ、記憶喪失者だってのにすごく律儀でな。物腰がすごく柔らかくていい人だったよ」
「へえ。話してる時とか新しく思い出したりとかした？」
と言ったところで口を閉じた。ついつい聞きたくなってしまうが、こう聞き始めると父もそうだが、私も聞き続けてしまうのである。やめたほうが良さそうだ。
「ん？　なんか言ったか？」
「ううん。気にしないで。ごめん。夕飯まだできてないんだ」
「いいよ。俺の帰りが予定より早くなっちゃったのもあるだろ。手伝うよ」
「いいよいいよ。取材でお疲れなのに」
「そうか？　いやあ申し訳ない」
「いいって」
父親の記事を見て以降、妙に父親がこの連載に熱を入れているのは明らかだった。この前の土日で基礎文献はぱっぱと読んでいくし、メモもいつもよりたくさん書いていた。めんどくさがりの父には、正直似つかわしくないほどの心血の注ぎっぷりである。いつもなら取材内容なんて聞くべきでないのに、さっきはそういうわけでつい尋ねてしまった。

正直、私自身も、この記憶喪失者を追いたいと思わずにいられなかった。なぜだかわからない。けど、そうすべき義務感に駆られたのは、確かだった。

注1：永久歯の摩耗具合によって、おおよその年齢を推定することは、人骨などを取り扱う解剖学や古病理学などでは一般的である。行方不明者または記憶喪失者などの年齢推定の際にも、歯の摩耗による年齢推定が使用される例は少なくない。